

杉原千畝とロシア正教

岩 村 太 郎

1. はじめに

第二次世界大戦中、リトアニアの首都カウナスの日本領事代理であった杉原千畝は、ナチスドイツに追われポーランドから逃れようとしていたユダヤ難民に、「命のビザ」を発給した。そしてこのビザを手にした6000人から8000人のユダヤ難民は、リトアニアからモスクワへ行きシベリア鉄道に乗り、ウラジオストックから日本を経由してカリブ海に浮かぶオランダ領キュラソー島を目指す。ナチスから逃れるための、東へと向かう旅である。しかしドイツとは当時同盟関係にあった日本は、そして特に外務省は、杉原が日本通過ビザを発給することに難色を示す。杉原と松岡洋右外務大臣との激しいやりとりは、外務省外交資料館に残されている。

外務省の訓令に背き、職を賭してまでユダヤ難民を救おうとした杉原への評価は、現在美談として高まる一方であり、杉原は日本のシンドラーであると言われている。ナチスに抵抗した英雄、人種差別に敢然と立ち向かったヒューマニスト、冷静な外交官、このような杉原千畝像が広く知れ渡っている。しかしながら、なぜリトアニアという小国の一外交官にすぎなかった杉原が、そこまで決断できたのか、という肝心の動機の点に関して従来の杉原研究は不十分であると言わざるをえない。そこで本論においては、杉原が実はロシア正教徒であったというあまり知られていない事実⁽¹⁾を手がかりにして、杉原の真の動機に接近することを試みたい。クリスチャンとしての杉原という視点は、以下に論述する通り、杉原自身のある個人的な理由により公

になりにくいものなのである。

2. 杉原千畝の生涯

杉原は1900年（明治33）1月1日、岐阜県加茂郡八百津町七八六において父好水、母やつの次男として生まれ、1986年（昭和61）7月31日、鎌倉にて永眠。86年の生涯であった。父の強い勧めにより一度は医学を志し京城医学専門学校を受験するが、これを放棄し早稲田大学高等師範部英語科予科に入学、本科に進むがこの間に外務省留学生採用試験に合格する。1919年10月に外務省ロシア語留学生として、ハルピンに渡る。同年11月1日に早稲田大学中退届が受理されている。外交官としての歩みは、ここから始まったのである。けれども当時のエリート外交官が、例外なく帝国大学出身者であったことを考えると、私学を中退した杉原の立場が初めからどのようなものであったかは想像に難くない。1920年からは志願兵として朝鮮京城府竜山の歩兵部隊員として入営するが、1922年に満期除隊し再びハルピンに戻り、日露協会学校（後のハルピン学院）の特修科に通い翌年に修了する。そして翌1924年には、杉原は外務省書記生に正式に採用された。杉原のロシア語の能力の高さには目を見張るものがあり、1926年には杉原千畝編纂による『ソビエト連邦国民経済大観』が外務省より発刊された。1929年からは日露協会学校の講師として、ロシア語文法や時事解説などを担当し、ロシア語を学ぶ側から教える側へとなっている。

その後の杉原の活躍ぶりは、驚くべきものがある。満州国政府外交部の組織事務、モスクワ日本大使館通訳官、満州国外交部北満特派員公署事務官、「北満鉄道売買交渉委員会」第二回正式会議の満州国側書記官、満州国外交部理事官、政務局ロシア課長兼計画課長、北満鉄道譲渡の日満ソ三国協定調印に参画、外務省大臣官房人事課、外務省情報部第一課、などの職についている。さらに1936年からは、日露漁業交渉の通訳官としてカムチャッカのペトロパブロフスクに着任、その年の暮れにはモスクワ日本大使館二等通訳官となった。その翌年の1937年には、杉原の入国をソ連が拒否するという事件が起きた。そこで杉原はフィンランドのヘルシンキ公使館の二等通訳官とし

て赴くために、一旦日本に戻り平安丸に乗り横浜港よりアメリカのシアトル港に行き、ニューヨーク港からドイツに渡りここから国際列車でヘルシンキに到着した。杉原には、何らかのスパイ容疑がかけられていたのである。

以上見てきた通り、杉原は数々の国際舞台で活動はしていた。しかしそれらはどれも、どちらかと言えば裏の世界と背中合わせのものが多い。各国間の利害が露骨に絡む、そして裏取引をすることが半ば常識ともなっている交渉の場、そのさなかに杉原は身を置いていた。当時の日本政府高官たちが情報収集をするために、杉原の語学力を必要としていたことは当然である。同時に杉原が、職務上スパイ行為すれすれのことを日常的に行っていたことも事実であろう。便利屋として使い回されていた、哀れな二等外交官という印象が付きまとう。

後にセンポ・スギハラとしてその名が世界に知られるようになったのは、1939年7月20日に杉原がリトアニアの首都カウナスの日本領事館領事代理に任命されたことに始まる。すべての杉原物語は、この日を境にして出発するのである。8月25日ヘルシンキ発、ベルリンを經由して28日カウナスに到着。翌1940年7月から9月にかけてのわずか二ヵ月にも満たない期間に、杉原は日本の外務省の圧力に抗して、ポーランドから逃れてきたユダヤ人たちに命のビザを発給した。この時に杉原が作成したビザ発給のユダヤ人リスト、いわゆる「スギハラのリスト」の存在は、アメリカのボストン大学ユダヤ研究所長、ヒレル・レビン教授の執拗な努力の結果、日本の外務省外交史料館に現存していることが確かめられている⁽²⁾。この資料は「昭和十五年外国人に対する在外公館旅券査証報告書一件 欧州の部」と題する外務省外交史料館所蔵のファイルに見つけられた。スギハラのリストは31ページで、1940年7月9日から8月31日までの日本へのビザ発給記録となっている。この事実が明らかとなったのは、1994年8月末のことである。実に50年以上も埋もれていたことになる。

1940年8月初めに外務省よりカウナスの領事館の退去命令が発動され、8月末領事館を閉鎖後杉原はメトロポールホテルに住まい、9月初めカウナス駅よりベルリンへ向かう。その後プラハ、ケーニヒスベルク、ブカレストなど

に赴く。しかし1945年8月の日本の敗戦により、事態は大きく一変した。1945年の8月17日、杉原はブカレスト郊外にあるソ連のゲンチャ捕虜収容所に収容された。翌1946年11月16日、帰国が許されブカレストを立つ。そして1947年4月シベリア鉄道でナホトカを經由してウラジオストックに行き、旅順に立ち寄った後、日本の博多港に上陸した。二ヵ月後の6月7日、外務省を退官。神奈川県藤沢市に住み、職を転々としながらひっそりと暮らしていた。けれども杉原にとって名誉なことに、1969年9月イスラエル宗教大臣バルハフティクより、ユダヤ難民を救ったことにより勲章を授けられる。さらに1985年1月18日イスラエル政府より「諸国民の中の正義の人賞」(ヤド・バシエム賞)を受賞する。同年11月にはエルサレムの丘で記念植樹祭と顕彰碑の除幕式が行われた。1986年7月31日、鎌倉にて永眠。以上が杉原千畝の公的生涯である。

私的な部分については、杉原はハルピン時代にロシア人女性と一度結婚したが、この結婚生活は長続きしていない。ロシア人妻の杉原に対する影響については、次節で詳しく述べる。1936年4月7日、菊池幸子と再婚をした。

3. ハルピン時代

1919年10月、杉原はハルピンに渡った。そして1936年までの間、基本的にはハルピンで過ごしている。その間に兵役に行ったり、海外に出張に出たりと多忙を極めていた。杉原千畝は、実に19才から36才までをハルピンとともに過ごしたのである。初めはロシア語を学ぶ日露協会学校の学生として、次にロシア語を教える教官として、そして1924年からは、満州国を表からも裏からも支える有能なあるいは便利な官吏として勤めた。

1924年12月22日、杉原は白系ロシア人のクラウディア・アポロノフと一度目の結婚をした。杉原研究者であり、自らもユダヤ人であるヒレル・レビン教授はその著『千畝』の中で、クラウディアがユダヤ系ロシア人であった可能性を述べている⁽³⁾。もしこのことが事実であるならば、杉原が何らかの意味でユダヤ人に対して深い愛情を生涯もち続けていた、と考えられる。そし

て杉原が、職を賭してまでユダヤ人たちを守ろうとしたことも説明がつくのである。歴史的事実として見るならば、当時のハルピンは人種的にも宗教的にも政治的にも、まさにそのつぼであった。ロシア革命に追われた没落貴族、本国ロシアに帰って反革命を企てる者、迫害から逃れてきたユダヤ人などである。クラウディアはロシア革命を逃れ、家族を支えるためにある酒場で働いていた、この時に杉原と出会った。クラウディアが16才の時のことである。杉原は彼女をユリコと呼び、クラウディアは彼をセルゲイ・パブロビッチと呼んでいた。クラウディア晩年のインタビュー取材の記録が残されているので、彼らがこのように呼び合っていたことは間違いない⁽⁴⁾。

杉原がセルゲイ・パブロビッチというロシア風の別名を持っていたことは、本論文においては極めて重要である。セルゲイとは、スギハラ之音に近いのでつけられた。しかしパブロビッチとは、杉原とクラウディアの結婚式の司式をしたロシア正教会の聖職者パーベルが杉原に与えた名前であった。杉原はパーベルを父のように慕い、次第にキリスト教に接近して行ったのであろう。やがて杉原はロシア正教の洗礼を受ける。杉原がクリスチャンとなった動機は、クラウディアの影響が決定的であり、その次にパーベルの存在が挙げられよう。この時期に日本人官吏が洗礼を受けてクリスチャンになるという事実は、想像以上に稀なことである。国際結婚も決して一般的ではなかった時代に、ロシア人妻を娶り、さらに洗礼を受けるということを杉原は決断したのである。常識的に見て、当時の日本人の宗教とは国家神道か仏教以外には考えにくい。しかも杉原は、日本の国益のみを守ることを託された日本人官吏であったはずである。当時のクリスチャン日本人には、スパイ容疑がかけられる可能性が大きかった、そこで戦中は隠れキリシタンのように振舞わなければならない人々も多かったのである。残念ながら、クリスチャンとしての杉原を追い求めることには限界がある。なぜならばそのことを裏付ける資料は、晩年のクラウディアの証言と、ハルピン時代の若き杉原を知る数少ない友人たちの記憶に頼らざるを得ないからである。それゆえにクリスチャン杉原という事実は、依然なぞに包まれている部分の方が多い。間違いなく言えることは、杉原が熱心に教会に通っていた、熱心に聖書を読

んでいたという事実は確かめられないこと、杉原自身自らがクリスチャンであることをあまり公言はしていなかったこと。篠輝久による『約束の国への長い旅』の中の一節に「主人（杉原千畝）もわたし（杉原幸子）も、ギリシャ正教を信じるキリスト教徒です。わたしは主人に、あのユダヤ人たちを助けてください、とたのみました⁽⁵⁾。」とあるように、二番目の妻幸子もクリスチャンであったこと。しかしギリシャ正教とあるが、果たしてこれがロシア正教を指しているのか、東方教会を漠然と指しているのかは分からない。また杉原千畝の葬儀は、神道で執り行われている。

クラウディアとの結婚生活は、1935年12月協議離婚という形で幕を閉じた。二人の間に子供はいなかった。そして学生時代から苦学をして必死の努力の末に一人前の社会人となった杉原と、没落貴族の血を引くクラウディアとの関係は難しいものであったに違いない。さらに杉原に伝わった情報が、このロシア人妻を通じてソ連側に漏れているという疑いもかけられたようである。杉原と離婚後クラウディアは、ユダヤ人医師ドーフと再婚をしクラウディア・ドーフとなった。その後のことについては何も分からないが、最後はオーストラリアのシドニー郊外の聖セルギウス養老院にて、93才で亡くなった。以上が客観的事実である。

杉原の最初の妻クラウディアに関することと、杉原がクリスチャンであったことの二点は、これまでの日本における杉原研究の中でほとんど無視されてきている。あるいはより正確には、触れずに済ませておきたいことがらであるようだ。それは二番目の妻である杉原幸子が、前妻のことについて語りたがらないからである。心情的に触れたくないというよりも、おそらく本当に杉原幸子は以上の二点に関して知らないとも思える。日本において杉原千畝の名前が一般的にも知られるようになってから、それは1988年に『約束の国への長い旅』が刊行されてからであるが、杉原研究は基本的には妻幸子の証言を元にして進められている。従ってこのようなことになってくるのである。

ハルピン時代の杉原千畝の行動と環境は、その後の人生に決定的な影響を与えたことだけは間違いがない。しかしながらわれわれが知りうることは、

あまり多くない。正確な杉原研究にするためには、謎の部分を残しながら取り組む以外にはないのである。

4. センポ・スギハラとしての杉原千畝

「査証（蘭＝オランダ＝領行敦賀上陸）滞在拾日限 昭和十五年八月七日 在カウナス領事代理杉原千畝」。一般に杉原ビザと呼ばれているものは日付こそ違うものの、パスポートの1ページに書き込まれた手書きのペンによる以上の書き込みである。ポーランドを追われたユダヤ人たちがナチスの包囲網を逃れるためには、シベリア鉄道で東に進み日本を經由して船で太平洋を渡り、入国に際してビザの必要のないオランダ領キュラソー島に向かうしかなかった。日本の通過ビザさえもっていればソ連側もソ連通過ビザを出す、との確認が取れていたために、日本通過ビザがどうしても必要だった、これさえ手に入ればユダヤ難民たちは生き延びられるのであった。2139枚見つかった「スギハラのリスト」には、家族の世帯主の名前のみが記されているので、杉原は各家族に1枚のビザを発給していたことになる。子供の数を加えると、おそらく6000人から8000人にのぼると考えるのが自然であろう。これだけの人々を救った「命のビザ」を、時の日本政府ににらまれることを承知で発給し続けた杉原の行動は、ユダヤ人のみならず世界中の人々の感動を呼んでいる。

前述した『約束の国への長い旅』の表紙のカバー袖に、次の一文がありここに引用してみたい。

ほんとうにあった愛の記録！

1940年の夏、リトアニア国の日本領事館のまわりはたくさんの人の群れにうめつくされました。男も女も老人も子ども達もいます。みんなじっとおしだまったままです。人びとの声にならない息づかいが、朝の領事館をつつんでいました。

ポーランドからナチスの迫害を逃れてきたユダヤ人難民です。彼らには、日本への逃げ道しか残されていません。みんな必死に「日本を通る

ビザを下さい」と杉原領事に訴えました。

「ビザを出してよろしいか？」杉原さんと日本の外務省との間で、ビザをめくり何回も暗号電報のやりとりが続きます。

しかし日本政府の答えは、「ビザを出すな」という命令でした。祖国にしたがうか、人類愛に生きるか杉原さんと奥さんはつらい立場にたたされます。

一般に知られている杉原像は、この引用通りのものである。青少年向けに書かれたものであるということを考えれば、その編集意図から見てこのような記述になることは当然である。さらに杉原の妻幸子の証言に基づく歴史考証に関しては、なお一層杉原を英雄視するものとなってしまう。真の杉原像を追い求めることは、さまざまな事情によって難しいのである。

杉原千畝という名前は、実は日本でしか通用していない。ハルピン時代には、一時セルゲイと呼ばれていたようであるし、ユダヤ人たちにはチウネという発音は難しいので、千畝を音読みにしてセンポと杉原は読ませていたのである。しかしこの読み方の違いは、その後大きな障害となってしまった。第二次世界大戦終了後、命の恩人である杉原のことを救出されたユダヤ人たちは必死で探した。けれどもセンポ・スギハラに該当する日本人はいないという、日本の外務省の極めて無責任な役人的怠慢により、ユダヤ人たちはなかなか杉原の居場所も、またその生死さえも知る事が出来なかった。確かに敗戦後マッカーサーが来るまでの二週間に内務省と外務省、軍部や警察は戦争犯罪に関する事実を隠蔽するために、大量の資料を焼き捨てたようではあるが、それにしてもこれが言い訳にはならない。センポ・スギハラが杉原千畝であることが分かったのは、1968年のことである。イスラエル政府は二人の外交官を日本に送り、センポ・スギハラの本当の名前が杉原千畝であることを突きとめた。ジェホシュア・ニシュリという杉原に救われたユダヤ人が杉原を訪ね、感動の再会を果たす。

センポ・スギハラとしての杉原千畝の行動が、戦後の日本でもし正しく評価されていたならば、杉原はノーベル平和賞を受賞していてもおかしくはな

かった、と筆者は本気で考えている。あるいはロシア語と数々の経験を生かすために、現在も暗礁に乗り上げている日ソ交渉には最適の人物ではなかったのか。近年杉原の行動が少しずつ明らかにされるにつれて、無責任な誹謗中傷も出ている。例えば、ビザ発給に関して日本の外務省の高官から内諾を得ていた、ユダヤ人について当時ほとんど興味のなかった外務省はこの件に関してどうでもよかった、重要でないポストと将来性のない人物とみなされていたことに対する杉原の反乱など、中には聞くに堪えないものも多い。国際的に評価されたセンポ・スギハラとしての杉原に遅れること約30年、また杉原の死後14年経った2000年10月になって、ようやく当時の外務大臣河野洋平は妻幸子に、杉原に対する従来の無礼を外務大臣として正式に謝罪した。これは杉原の生誕百年に合わせて行われたものである。しかしこれも外国での杉原に対する絶大な評価に追従する形でなされたことは、恥ずべきことではないだろうか。主体的な行動をした杉原の名誉は、ここに一応形の上では回復されたと言える。しかしこれに終わらせず、われわれは杉原の存在を次世代に語り継がなければならない。特に杉原個人の人道行為を、当時の日本の外務省の手柄にしたいとする発言に対しては、真っ向から戦わなければならない。

5. 杉原千畝とロシア正教

閉鎖されたカウナスの領事館を出た後も、ホテルの中でビザを書き続けた杉原、さらにベルリンへ向かうために乗り込んだ列車の中でも、その出発の直前までビザを書き続けた杉原。一人の外交官の強い決断により、何千人ものユダヤ難民の命が守られたのである。杉原の行った行動の動機を探るために、杉原千畝とキリスト教との関連に注目したが、残念ながらこの問題に関してはこれ以上の憶測は避けるべきである、と筆者は考える。間違いなく言えることは、クラウディアと杉原と幸子の三人が、洗礼を受けたクリスチャンであったこと、以上だけである。セルゲイ・パブロビッチという名の杉原千畝の研究は、今後を待たなければならない。

最後に杉原とキリスト教を結びつける、不思議な歴史的事実を覚えておき

たい。杉原ビザを手にしたユダヤ人たちは、ウラジオストックから福井県の敦賀港に続々と着いた。1940年終わりから、1941年暮れにかけてである。多くのユダヤ人は、ここから横浜へ行き船で太平洋に漕ぎ出した。また一部のユダヤ人は、神戸に行き中国の上海へと向かった。この間日本滞在中のユダヤ人たちの世話をしたのは、ホーリネス教団に属する日本のクリスチャンたちであった。ホーリネス派の人々は、いち早くナチスによるユダヤ人殺害を知らされており、またユダヤ人国家再建にも積極的であった。日本のユダヤ人協会から直接依頼を受けた牧師瀬戸四郎は、同じホーリネス派の牧師や信徒に応援を頼み、日本滞在中のユダヤ人たちの世話をした。

わたしたちをのせた船が、港をはなれようとしていました。行き先は上海です。

波止場に日本人が集まってきました。ホーリネスの人たちです。彼らは、運んできた木箱をこわすと、中から赤いまるいものを取りだしました。

りんごでした。

りんごが、わたしたちをめぐらしてとんできました。彼らは、りんごでわたしたちを“殺そう”としたのです。そして、わたしたちはりんごで“殺された”のです。この意味がわかりますか？

ナチス・ドイツが、何百万もの兵隊や、戦車や飛行機を使ってできなかったこと——ユダヤ人の心をうばうということ——を、彼らは赤いりんごで成功しました⁽⁶⁾。

杉原によって救出された、あるユダヤ人の回想である。しかし不幸なことに、この出来事の直後にホーリネス教団は日本政府によって弾圧される。皮肉な連鎖で、杉原とロシア正教はつながっていた。

6. おわりに

公人としてではなく杉原個人がもっていた二つの事実、すなわち杉原がク

リスチャンであったこと、最初の妻がロシア人であったこと、これらはあまりにも私的なことからであるために、これまでほとんど皆が避けて通ろうとしていた。個人の信仰の問題と個人の私生活の部分は、なかなか立ち入ることが難しい。筆者は杉原自身の秘密やその私生活について、あえてそれらを暴こうという下品な意図は全くもっていない。ただし杉原千畝研究を進めるうえでは、これらの事実には触れざるをえないと考えている。

杉原千畝とロシア正教との関連は、結論から言って本当のところは何も分からない、クラウディアについても同じである。首尾一貫して杉原も幸子も、この二つのことに関しては沈黙を守り続けたからである。けれどもそれは決して過去の隠蔽ではないであろう、また杉原の行った歴史的貢献の価値を少しも減ずるものでもないのである。

(筆者は恵泉女学園大学より国内研修員として、2001年4月1日より2002年3月31日まで、慶應義塾大学文学部において訪問助教授として研究活動を行うことが許された。この間の筆者の指導教授は、慶應義塾大学文学部の小松光彦教授である。国内研修中の研修成果報告の一部として、本論文を提出する。)

注

- (1) ヒレル・レビン『千畝』、諏訪登 篠輝久 監修・訳、清水書院、1998年、102頁。渡辺勝正『真相・杉原ビザ』、大正出版、2000年、194頁。これらの箇所および杉原の妻幸子の証言から、杉原が洗礼を受けたことは間違いないが、それを裏付ける客観的資料は何も残っていない。
- (2) この資料の現存が一般に明らかにされたのは、1994年8月24日付けの中日新聞の朝刊が最初である。
- (3) 前掲書『千畝』、96頁。さらに同書99頁には、クラウディアがユダヤ教の戒律に基づいた食事をしていた場面が記述されている。
- (4) 前掲書『千畝』、101頁。
- (5) 篠輝久『約束の国への長い旅』、リブリオ出版、1988年、35頁。

(6) 前掲書『約束の国への長い旅』, 130頁。

引証資料

篠輝久『約束の国への長い旅』, リブリオ出版, 1988年。

下山二郎『ホロコースト前夜の脱出』, 国書刊行会, 1995年。

杉原誠四郎『杉原千畝と日本の外務省』, 大正出版, 1999年。

杉原幸子『六千人の命のビザ』, 朝日ソノラマ, 1990年。

杉原幸子 歌集『白夜』, 大正出版, 1995年。

杉原幸子・杉原弘樹『杉原千畝物語』, 金の星社, 1995年。

杉原幸子監修・渡辺勝正編著『決断・命のビザ』, 大正出版, 1996年。

中日新聞社会部編『自由への逃走』, 東京新聞出版局, 1995年。

渡辺勝正『真相・杉原ビザ』, 大正出版, 2000年。

ゾラフ・バルハフティク『日本にきたユダヤ難民』, 滝川義人訳, 原書房, 1992年。

ヒレル・レビン『千畝』, 諏訪登 篠輝久 監修・訳, 清水書院, 1998年。